

保育者ワークショップ

文字遊び～小学校との連携を考える～

仁愛女子短期大学 准教授 前田 敬子



最も早く認識する文字は様々な物に記されている自分の名前であり、その文字が自分自身を示していることに喜びを持ち、保育士等と呼ばれる名前と文字で表されている名前を照合させていきます。そして、友だちや身の回りの人の名前や物の名前を覚え、それらを表す文字に興味や関心を抱いたり、いろいろなところに文字や記号を見つけ、確認してきます。また絵本や自分の連絡帳、室内外の様々な表示や文字を見たりする中で、自ら真似てかいてみようとしていたり、保育士等にかいてもらったりして文字に親しんでいきます。

お店屋さんごっこや郵便屋さんごっこのように、文字や記号のやり取りのある遊びを楽しみながら、文字などに親しみ、保育士等や友達と文字で伝え合う喜びが芽生えていくよう見守ることが大切です。また、画材や筆記具などの用具や室内の環境設定にも十分配慮していきます（『保育所保育指針』解説書）。

上記の通り、幼児教育では「自然な形で育っていくよう環境の構成に配慮」し、子どもたちが「遊びを楽しみながら」「興味や関心を抱き」「必要感をもって」「自ら」読んだり書いたりしようとするような援助を基本とする。

しかし、実情は、子どもによって文字に対する興味関心に幅があり、興味を持つ子は家で覚えて進んでいく一方、興味をもたない子は就学前になっても興味が無い。鉛筆の持ち方や筆順についても、保育者は、遊びの中で正しい持ち方や正しい筆順を伝えるように心がけるが、すべてを把握するのは困難である。

そこで、文字に「自然な形で興味関心をもち」、「遊びを楽しみながら」覚える、ワークブックに頼らない方法を中心にワークショップを展開した。

補足的な意味で、学生に見える鉛筆の持ち方や平仮名の筆順の問題点について話をした。

1. 幼児教育における文字の位置づけ

現行『幼稚園教育要領』は、文字に関してどのように書いているか。言葉の獲得に関する領域「言葉」（経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う）の「2 内容（10）日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう」という部分で、『保育所保育指針』も同様である。「環境を通して育てる」ことを基本とするため、解説書にも以下のように書かれている。

幼稚園生活の中で、名前や標識、連絡や伝言、絵本や手紙などに触れながら、文字などの記号の果たす機能と役割に対する関心と理解が、それぞれの幼児にできるだけ自然な形で育っていくよう環境の構成に配慮することが必要である。また、それぞれの幼児なりの文字などの記号を使って楽しみたいという関心を受け止めて、その幼児なりに必要感をもって読んだり、書いたりできるような一人一人への援助が大切である（『幼稚園教育要領』解説書）。

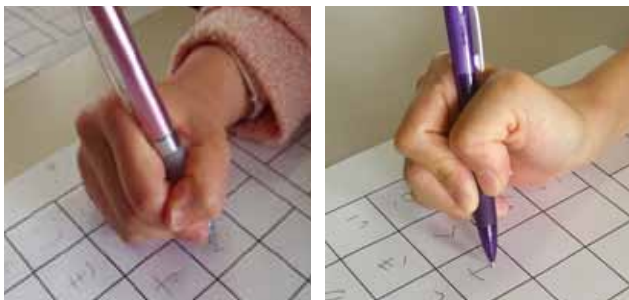


2. 学生の実態

(1) 鉛筆の持ち方

筆者の目視によって持ち方のタイプ分けをし、それぞれの全体に占める割合を算出した。また、持ち方と手先の器用さを一定時間内の「大豆運び」で実証しようと考えた。

調査時期は2014年4月28日、対象人数は幼児教育学科127人である。調査方法は割り箸を使って10センチ離れた箱まで大豆を移動させる作業で、30秒以内に移動させる大豆の数をみた。鉛筆の持ち方と箸の持ち方には、箸の手前に位置する一本の持ち方と鉛筆の持ち方との間にある程度の相関関係があると仮説を立ててこの実験をした。



結果、持ち方は、全体の4割が親指突き出し型で、正しい持ち方は2割以下であった。大豆の個数は、鉛筆を正しく持つグループが一番多く、つかみ持ち・握り持ち・つまみ持ちのグループが一番少なかった。また、親指突き出し型やつかみ持ちのグループには、30秒間に3個など極端に少ない例もある。

	人数	割合	平均個数	最低・最高
① 親指突き出し型	54	42.5%	9.94	3~16
② つかみ持ち、にぎり持ち つまみ持ち	25	19.7%	9.60	4~15
③ 人指し指そらし型	25	19.7%	10.12	6~14
④ 正しい持ち方	23	18.1%	11.09	7~16
合計	127			

(2) 平仮名の筆順

短大生の平仮名の筆順を2回にわたって調査し、2012年生から2014年生について分析した。第1回は、対象258人(本学幼児教育学科学生2012年生及び2013年生)、調査時期は2013年9月25~30日である。50音図に筆順を示

す数字を書き込む方法で行った。第2回も方法は同様で、対象人数は128人(2014年生)、2014年4月18日、24日の両日に調査した。結果は以下である。

筆順間違いが一字も無く、すべてを正しく書く学生は、第1回(2012年生及び2013年生)で3割弱、第2回(2014年生)で4割弱であった。いずれにしても高くはない。

筆順誤りは「も」が多く、2回の調査を通して、全体の5割、短大生2人に1人は正しくない。続いて、「や」「せ」「ら」「よ」等の誤りが多い。

第1回

《誤り数》
全体の
誤答無し…67人(26.0%)
1つ誤り…91人(35.3%)
2つ誤り…60人(23.3%)
3つ誤り…19人(7.4%)

《誤り文字》
全体の
① も…132人(51.2%)
② や… 44人(17.1%)
③ よ… 37人(14.3%)
④ ゆ… 28人(10.9%)
⑤ な… 24人(9.3%)
⑥ ら… 20人(7.8%)
⑦ せ… 13人(5.0%)
⑧ か… 8人(3.1%)

第2回

《誤り数》
全体の
誤答無し…47人(36.7%)
1つ誤り…47人(36.7%)
2つ誤り…23人(17.9%)
3つ誤り… 8人(6.3%)
4つ誤り… 1人(0.8%)

《誤り文字》
全体の
① も……………60人(46.9%)
② や、よ…各24人(各18.8%)
③ せ、ら…各7人(各5.5%)
④ き、さ、ほ、まを…
各1人(各0.8%)

3. 学生の矯正

(1) 鉛筆の持ち方

正しい鉛筆の持ち方の手順(以下①~③)を筆者なりに考えた。

- ① 右手親指のはらを人差し指の第一関節側面につけると、アルファベットの「D」のようになる。
- ② 指のつなぎ目に鉛筆をはさみ、中指の第一関節側面を鉛筆の枕のようにして、鉛筆を安定させる。芯の先から見ると、ちょうど鉛筆胴体を親指、人差し指、中指の三点で支えるのが分かる。薬指と小指は軽く添える。
- ③ 手全体に力を入れすぎず、手のひらと指の間に小さなゆで卵でも含むような丸い形を保つ(風が通る、丸

い空間ができるようにする)。

現在、鉛筆製造販売会社と学習雑誌との協力で、従来の六角形とは異なる三角形の鉛筆が商品化され、もち方練習用に使用されている。「親指・人差し指・中指」で三角鉛筆の側面を支える感覚を覚え、習慣化するのに有効である。

(2) 平仮名の筆順

①誤りやすい文字「も」は、横二画を先に書く傾向がある。「き」「ほ」「ま」のように横の二画を先に書く例と混同されるためであろう。

②「ら」「よ」「な」は、数字の「5」のように大きな部分を先に書く傾向がある。「ら」は「良」、「よ」は「与」、「な」は「奈」が元字であるから、小さな点を先に書くのが正しい。その他、1972年の調査(『幼児の読み書き能力』国立国語研究所)によると、「け」「に」「は」「ほ」などを、右の部分から書く誤りが多いという。ライオンを描く子どもがたてがみから描くように「特徴的な部分を先に描く」傾向が文字にも発揮されると仮定するならば、「ら」「よ」「な」の大きい部分から書く例、「け」「に」「は」「ほ」を右側から書く例も、特徴的な部分から書いていることで説明がつくが、正しい書き順ではない。

③「せ」「や」は、最初に書いた横画に、長い縦画を交わらせ、後で短い縦画を足す誤りが見られる。

以上の調査で、学生が誤りやすい文字をリストアップできたので、それらを中心に学び直しをするように指導したい。

4. 幼児教育の課題

(1) 鉛筆を持つ前の準備

幼児教育では、鉛筆を持つ機会が少ない。だが、小学校に入って初めて鉛筆を持たせるのでは、むしろ不自然な段差を助長するのではないだろうか。

では、逆に、幼児教育が小学校を先取りして鉛筆を早く持たせればよいのかというと、鉛筆で書くには、指先や手首、肩、腕の運動機能の発達、適度な筆圧の調整などが必要で、それら基礎力を養うことの方が先決である。そのために「指遊び、手遊び、おはじき、切り紙、折り

紙」等で手指の巧緻性を高めること、「ほうき、バトン、縄跳び」などで手首の機能を高めること、「砂遊び、雲梯」などで肩や腕の力をつけること、「くれよん、色鉛筆、絵具筆の持ち方に慣れ、筆圧を調整しながら自由に線を引くこと等が幼児教育に求められる内容であろう。一色八郎の「線遊び」(『幼児の手の発達と文字の指導』黎明書房、1985年)は非常に興味深いものである。

園や小学校で三角鉛筆や矯正用の器具を使うところもあるが、使う時期について検討の余地があると考えている。

(2) 平仮名の読み書きの準備

音節分解ができること(たとえば「い・ぬ」「う・さ・ぎ」「ら・い・お・ん」等)、上下左右が認識できることも文字の読み書きを構成する力である。そのため、「○で始まる言葉集め」「しりとり」「ねことねずみ」「猛獣狩りに行こうよ」等の遊びで音節分解に馴れ、運動会の行進やダンスなどで「右・左」と掛け声を掛け、ボールを「上から・下から」投げたり転がしたりすること、「福笑い」で上下左右を伝えること等も、遊びを通して読み書きの準備性を高めていることになる。「買い物ごっこ」「郵便屋さんごっこ」の遊びを通して興味関心を高める例は多いが、図画の氏名書きや帰りの会の連絡帳配りを文字に触れる大切な過程にしている園が少なくない。

そして、子どもが自然に文字を書いても、保育者側に読み誤り、書き誤りしやすい文字のリストアップができていれば、心に余裕が生まれるのではないだろうか。古い研究ではあるが国立国語研究所1972年の調査『幼児の読み書き能力』で、読み誤り、書き誤りの多い文字が明らかである。形が似た文字同士(「ね、れ、わ」など)、音が似通う文字同士(「ぬ、ね」など)は誤り易い傾向にある。

5. 文字遊びの提案

(1) 線遊び

一色八郎の線遊び「鉛筆のピクニック」の自由自在に鉛筆で線引きをする活動は、字を書く以前の基礎力養成に欠かせないものであろう。小学校教諭から、就学後極端に筆圧の弱い児童がいるとの指摘がある。初めから小

さくきれいに書くのではなく、存分に大きく自由自在に線を引いて、肩や腕、手指の動きを高めておくことが大事である。



(2) パネルシアター「平仮名いろいろぺったんこ」

先行研究からヒントを得て筆者が考案した、パネルシアター文字板を紹介した。幼児教育では、字形の面白さに気付き、自然と読めるようになり、書こうとする気持ちが高める。小学校1年生では、誤りやすい筆順に注意し、平仮名を組み合わせる言葉を作る活動などに使える。字を覚えるには、50音通りでなく、画数が少ないものから覚える、似ている字を比べながらセットにして覚えるなど柔軟に捉えると面白くなる。一色八郎が「アイ式」と称して独自の平仮名順を提唱していることにも通じる。

このパネルシアターを保育室に常設し、子どもが自由に扱える環境を整えておくことが、文字に関する興味関心を全体的に高め、個人差の幅を緩和し、全く興味を示さない子どもを減らすことにつながると考えている。



(3) 平仮名ビンゴ

番号の代わりに平仮名を書き込んだカードを配布し、保育者が示す文字と同じ文字がカード上に見つかれば、その文字に○印を付ける。○が縦横斜めに並べば「ビンゴ」と叫び、勝ちとなる。

「画数が少ない字」シートや「間違えやすい字」シートなどを用意しておくことで、難易度を調整できる。小学校では、シートに子ども自身が書き込む方法で遊べる。

(4) 筆順国盗りゲーム

二人組になり、真ん中に紙を一枚置く。一人は青色の筆記具、一人は赤色の筆記具を持つ。二人でジャンケンをして勝ち負けを決める。保育者が任意に平仮名の一画分を書くのを見て、ジャンケンで勝った子どもが紙の上に同じように書く。再びジャンケンで勝ち負けを決める。保育者は先の一画目に二画目を書き足す。今回、勝った子どもは保育者が書く二画目を真似て同じように紙の上に書く。そのように、一画ずつ勝った子どもが書いていき、字が完成したところで、たくさんの画数を書けた子どもが、文字を書いた紙を獲得する。引き分けの場合には、文字の紙は誰のものでもない。また別の紙を用意して、別の字を書いていく。

文字に「自然な形で興味関心をもち」、「遊びを楽しみながら」触れる遊びを、小学校や周囲の園との情報交換によって集め深めていくことが、子どもの育ちの連続性を見据えた保幼小連携となり得るだろう。